HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 三巻本『枕草子』の研究［論文内容及び審査の要旨］ |
| Author(s) | 石垣, 佳奈子 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第13281号 |
| Issue Date | 2018-09-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/72202 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Kanako_Ishigaki_abstract.pdf, 論文内容の要旨 |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：石垣　加奈子

学位論文題名
三巻本『枕草子』の研究

〔本論文の観点と方法〕

『枕草子』の伝本には、雑纂本の三巻本・能因本、類纂本の前田本・堺本の四系統があり、現在、注釈書の底本には三巻本を用いることが主流となっているが、先行研究においては、三巻本偏重の現状を見直す必要も指摘されている。また、近年、書誌学の見地から、三巻本を定家本とする新見も発表されている状況にある。いずれも、『枕草子』諸本の理解において重要なことは確かだが、同時にそれだけでは不足する点もあると考えられる。まず、三巻本は昭和初期に至って急速に注釈書の底本として採用され始めたこともあって、『枕草子』の古態を留めた善本とされつつも、その性格については従来の研究史において十分な議論がされたとはいえない。また、書誌的研究の成果と、三巻本の持つ方向性の解明には、今少し距離がある。定家本としての性格や伝来過程などの検討を、本文や章段配列の考察と直ちに結びつけることは難しい。

このような研究状況を踏まえ、本論文では、三巻本の本文と章段配列に着目することによって、三巻本の持つ論理や方向性を読み取り、その編纂方針を明らかにすることを目指した。そのために、主に三つの観点から考察を行っている。一つ目は、三巻本『枕草子』の巻末部についての考察である。『枕草子』諸本は、先述の通り雑纂本と類纂本に大別できるが、同じ雑纂本の中でも、三巻本と能因本の章段配列の大きな違いは、巻末部にある。この違いを中心に分析していくことで、三巻本独自の方向性を見ることができるであろう。二つ目は、物語に関わる記述を含む章段の検討である。三巻本『枕草子』の巻末部分には、先行する物語を踏まえた章段が多く並んでおり、その章段配列や本文に対する物語受容の影響を考えることは非常に有効であると考えられる。三つ目は、清少納言の出仕前と思われる出来事を描いた章段についての検討である。中宮定子に仕えた時期の記事がほとんどを占める『枕草子』の中で、出仕前の出来事を描くことは異例である。しかし、三巻本『枕草子』の冒頭部には、出仕前の出来事を記述する章段が置かれており、それは巻末部において宮仕えを辞去した清少納言像が語られることと、対照をなしていると考えられる。この点については、冒頭部以外の出仕以前を描く章段ともあわせて考察を行う。

以上の点について、本論文では、三巻本の本文と章段配列を分析することで考察を行った。本文については、類纂本との違いや三巻本独自異文についても検討している。また、章段配列については、前後の章段と共通の要素によってゆるやかにつながる章段の連鎖を、章段群として捉えることによって、その編纂方針を見極めるものである。

〔本論文の内容〕

本論文は、序章・終章に加え、第一章から第六章の各章で構成されている。上述の三つの観点のうち、清少納言の出仕前と思われる出来事を描いた章段の検討は、第一章、第二章、第六章に相当する。物語に関わる記述を含む章段の考察は、第三章、第四章、第五章である。三巻本『枕草子』の巻末部については、第四章、第五章、第六章がこれにあたる。

まず、第一章と第二章では、清少納言出仕前を描く章段が、三巻本『枕草子』の本文や章段配列によってどのように作品中に位置づけられているかという問題を取り扱った。

第一章では、「円融院の御果ての年」の章段を取り上げた。この章段では、清少納言出仕前の聞書をあたかも直接の見聞であるがごとく描き、章段前半の不安と後半の安堵の差をつけている。このことは、一条天皇を取り巻く政治的不安を、存在しないものとして打ち消す効果をあげていることを明らかにした。三巻本の本文ではこの方向がより鮮明である。

第二章では、「説経の講師は」段に繰り返し現れる「今」と「昔」の対比に着目し、三巻本では、〈作者〉による今昔の対比表現という前提がより徹底されていることを明らかにした。三巻本におけるこの今昔対比表現は、その後に続く、出仕前を描いた「小白川といふ所は」段が『枕草子』中に存在することを自然に見せることに貢献している。この「小白川といふ所は」の段は、あえて花山天皇退位に関する話題に触れながら、そこにある政治的な対立をなかったもののように描くという効果を持つ。

このように、第一章・第二章ともに、政治的な不安にあえて触れつつ、それを否定していくという方向性は、三巻本の本文により強く認められることを明らかにした。

つづく、第三章から第五章では、三巻本『枕草子』における『落窪物語』『伊勢物語』『うつほ物語』の受容についてそれぞれ論じた。

第三章では「三月ばかり物忌しにとて」の段を取り上げ、この章段の清少納言の文における「少将」が『落窪物語』の道頼であり、同物語中の雨夜訪問譚がこの章段のやり取りに活かされていることを指摘した。そして、この章段が『落窪物語』に基づいたやり取りを含むことによって、三巻本『枕草子』の前後の章段配列に影響を与えていることを述べた。

第四章では、「また、業平の中将のもとに」の段について論じ、三巻本の章段配列の中では、この業平とその母に関する歌語りは、定子亡き後の時間を想像させる役割を担うようになると結論づけた。そして、三巻本『枕草子』の終末近くに置かれたこの段は、宮仕えを退いた作者像を読む者に想像させるように配置されているものと考えられる。

第五章で取り上げた「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」の段は、一見漠然とした書きさしの物語のように見えるが、実は『うつほ物語』忠こその物語を下敷きにしたものとの仮説を提示した。その上で、この章段の前後には清少納言自作の和歌を語る章段群が存在しており、『うつほ物語』が愛好された定子周辺を意識しながらも、そこから少し距離を置くという姿勢が見られることを解明した。

これらの検討から、三巻本『枕草子』では、当時享受されていた物語の引用が章段配列のあり方と密接に関わっていることが明らかになった。

さて、最後の第六章は、第四章で扱った章段群の前後に視野を広げて検討したもので

ある。その結果、定子崩御後を想起させる章段群は、「宮仕へする人々の出であつまりて」からすでに始まっており、章段の連鎖の範囲をさらに広げられるという結論に至った。

以上の検討から、本論文では、三巻本『枕草子』の冒頭部と巻末部は、〈作者〉が、まだ宮仕えをしていなかった頃から、その後定子のもとに出仕し、定子崩御後に宮仕えをやめて地方に下る、という一連の流れを作り出していることを論じた。『枕草子』の各章段は、内容的にはそれぞれが「断片」とも言えるものであるが、それを一人の〈作者〉という存在によってつなぎ止めていこうとする三巻本の姿勢が本文と章段配列に具現しており、これを三巻本『枕草子』独自の論理として認めることができる。